

デニス・クロセック Dennis Klocek

「日の出」 The Sunrise

米国ヴァルドルフ教育研究所の

『治療が教育となるとき：人智学医学紀要選集』Vol.3から、

ハンス・ヨアヒム・ポールの

「惑星が人間の有機体に及ぼす影響」に続いて、

デニス・クロセックの「日の出」をとりあげる。

デニス・クロセック (Dennis Klocek) は、人智学をベースに、
自然科学、意識研究、バイオダイナミック農法、錬金術などの分野で
国際的に活動しているアメリカの研究者、作家、芸術家。

主なテーマとしているのは、
ゲーテ的自然観察と形態学、
バイオダイナミック農法と「聖なる農業（錬金術）」、
気候学・天文学と地球の魂、
内的な探求 (Inner Work) と色彩論で、

シュタイナーの思想を過去の伝統として繰り返のではなく、
「現代の先端科学や課題に対して
自ら能動的にアプローチするための実践的なツール」であるとし、
現代の自然科学（物理学や気象学など）のデータと、
瞑想や芸術的知覚によって得られる「内的な真実」を橋渡しすることが、
これからの人類の課題であるとして研究を行っている。

この論文は、当初、Journal for Anthroposophical Medicine（人智医学ジャーナル）
Vol.9、1992年で発表されたもの。

デニス・クロセック (Dennis Klocek)

「日の出」 (The Sunrise)

●基本的な視点

日の出は単なる天文現象ではなく、
地球の呼吸と生命の更新、
光と闇・物質と霊・個と全体のドラマが毎朝演じられる神秘の場。
グローリーや色彩の移ろいは、魂のプロセスそのものの鏡であり、
私たちに治癒の潜在力と霊的なバランスを思い出させる。

力学的・科学的な現象を超えた、
詩的・霊的・錬金術的な視点から、
地球の生命エネルギー（エーテル力）が息を吐き出し、
世界を蘇らせる「ルーン（神秘の象徴）」として
「日の出」がとらえられる。

●要点

1) 光と影の界面が色彩を生む

- ・日の出の本質は、
光と闇が重なり合う「フリンジ・ゾーン（境界領域）」にある。
ゲーテが指摘したように、色彩の真の性質はこの界面で現れる。
- ・大気という「混濁した媒体（タービッド・ミディアム）」が、
光の背景か闇の背景かによって、
青（寒色）と赤（暖色）という極性相反する色を生み出す。
- ・この光と影の「滑るような重なり」が、
複雑な色彩のシークエンスを引き起こす。

2) グローリー（光輪現象）を鍵とした色彩のモデル

- ・霧や雲の中で観察される
グローリー（Brocken spectre）を主要な比喻に用い、
影の周りに現れる光輪、特にローズ・マゼンタ（赤紫）と
パロット・グリーン（黄緑）の交互する外側のリングが、
色彩の根源的な極性を示しているとする。
- ・これら2色はスペクトルの極性がブレンドされた
「プライマル・カラー（根源色）」であり、
他のすべての色がここから生まれる。

3. 日の出の色彩シークエンス

- ・ファースト・ライト（薄明）：
バイオレット（夜空）の上に淡い緑の帯が脈動し、光線が滑る。
- ・次にブルー（青）が現れ、空のドームを形成。
- ・ローズ・ブルーム（薔薇色の開花）：
マゼンタ/ローズが地平線から広がり、西の空にも映る。
- ・インターメッツォ（間奏）：
完全なスペクトルが一時的に現れる。
- ・太陽の出現：
ヴァーミリオン、オレンジ、ゴールデン・イエローなどの暖色が
爆発的に輝き、物質化（個体化）の極に達する。

○色彩は3つのグループに分けられる：

- ・光の背後: 青・紫（空間、冷たさ、後退）
- ・光の手前: 赤系（物質、暖かさ、接近）
- ・光の周辺: 黄緑～緑（架け橋、調和）

4) 錬金術的・霊的解釈の核心

- ・大いなる黄変化（The Great Yellowing）：
乾燥・重力・個体化・物質化のプロセス（赤→黄→影）。
肉体化と自我の肥大化の象徴。
- ・大いなる青変化（The Great Bluing）：
湿潤・軽力・統合・霊性のプロセス（青・紫）。
- ・その中間にある影を持たない光（緑がかった柔らかな光）こそが、
真のエーテル光であり、
「大いなるメルクリウス（水銀）＝キリスト的な均衡者」である。

グローリーの構造は、エーテル界のダイナミズム

（ローズ・マゼンタとグリーンの相互作用から生まれるブルー）を示す縮図。
日の出が、この2つの極性（黄変化と青変化）の緊張を癒やし、
統合をもたらす瞬間として描かれる。

●本文

力学的な観点から見れば、地球が自転するという運動が、「日の出」として知られる多様な現象の数々をもたらします。しかし、より詩的な観点から見れば、日の出とは、人間の生命にとって極めて重要な意味を持つ「ルーン（神秘的な象徴・記号）」に他なりません。

日の出のとき、地球はその生命エネルギーを「息として吐き出し」、あらゆる生命形態を再び活気づけ、蘇らせます。この呼吸は、生命力（エーテル力）の微細な揺らぎ（攪拌）なのです。この現象は、山岳地帯において、太陽の光が山頂に差し込むちょうどその瞬間に、湖の表面をさっと揺らす「微風」として経験することができます。

階下の谷間には、地球の根源的な力とその影である「暗闇」が横たわっています。光と影の間に繰り広げられる微細な力と緊張の遊びは、静かな揺らぎ、すなわち影の深淵の中で色彩がまたたき、きらめき始める微細な動きとしてスタートします。

詩人であり自然科学者でもあったゲーテは、この「光と影が出会う境界領域（フリンジ・ゾーン）」においてこそ、色彩の真の本質が経験されるのだと認識していました。この領域は、光の潮流と闇の潮流が出会い、互いに重なり合う「インターフェース（界面）」なのです。この重なり合う運動の中から、世界に色彩のダイナミズムが立ち現れるのです。

自然界において、この「重なり合うプロセス」は様々な方法で達成されます。

宇宙の暗闇の手前に、混濁した大気（空気の層）が存在することで、青い空が生み出されます。

反対に、太陽の光の手前に、これと同じ混濁した大気が存在することで、その色はスペクトルの黄色側へと移行します。

これらの現象において、空気という「混濁した媒体（タービッド・ミディアム）」は、それが通過する背景のトーン（基調音）に応じて、全く正反対の（極性的な）方向に作用するのです。

日の出の瞬間、光と闇が「背景（地）」と「主役（図）」の関係を互いに入れ替えながら繰り広げる繊細な遊びが、色彩のシークエンス（移り変わり）の複雑な展開を引き起こします。地球の運動は、光と影の平面を互いにスライドさせ、それらの関係性を変化させていくのです。

1) 太陽の光が最初に現れるとき、その主たる運動は「光が宇宙の暗闇の上を滑るように進む」ことです。これが「青」の立ち上がりを生み出します（これについては本論文の後半でさらに詳しく語ります）。

2) 日の出が進むにつれて、地球を覆っていた「（手前にある地上の）暗闇」が、観察者と「（後ろにある）光」の間に割り込んで（遮って）きます。これにより、スペクトルの「赤」の側が前面に引き出されます。

この「赤と青への分離」こそが日の出の核心であり、その神秘と「治癒の潜在能力」の源泉なのです。これから見ていくように、光と影の層が互いに滑り合うように重なるこの運動は、太陽が黄道十二宮を通過する「1年の歩み」の文脈と、地球の「1日の自転運動（日周運動）」とが連動して生み出される産物なのです。

しかしながら、これらのイメージ（光と影のダイナミズム）を扱い始めるためには、日の出を取り巻く「運動の結びつき」全体の、本質的な性質を捉えようとするのが助けになるかもしれません。これをより明確に行うために、私たちは「グローリー（The Glory：光輪／ブロッケン現象）」としてよく知られている現象を参照することができます。

ローズ・マゼンタとパロット・グリーンこそは、他のあらゆる色相がそこから浮かび上がってくる「2つの根源的な色彩（プライマル・カラーズ）」なのです。これらは、光と闇の現象がダイナミックなバランスを保っている場所において立ち現れます。

飛行機からグローリーを見るこの状況において、これら2つの色彩（マゼンタとグリーン）は、グローリーの外側のエッジ（縁）で、無限に続くパルス（脈動）のように交互に現れます。そして最終的には、より暗い外側のエッジ（宇宙の闇）へと消失していき、その融合の結果として、かろうじて感知できるかできないかというほどの「バイオレット／インディゴ（青紫／藍色）」へと行き着くのです。

この「グローリー」のイメージの中に、色彩全般の本質、そして特に「日の出」の本質に関する極めて重要な神秘（ミステリー）が明かされています。

もし私たちが、完全な暗闇から光の到来に至るまでの「日の出の全プロセス」を観察するならば、そのグローリーの異なるリングの中に見出された「様々なパルス（脈動）」が、現実の空に展開していく様子を見ることができます。

太陽が地平線に到達する約1時間半から2時間前、「ファースト・ライト（薄明／最初の光）」として知られる現象が展開し始めます。ファースト・ライトの瞬間に、最も早起きな（進歩的な）雄鶏たちが、朝の祈りの鳴き声を上げ始めます。

東の空を見つめると、地平線に現れたゆっくりと緑色を帯びていく帯とは対照的に、そのはるか上空の空は「バイオレット（青紫）」に見えることに気づくでしょう。この「淡い緑の帯」は脈動（鼓動）しているような感覚を放ち、それが広がるにつれて、静まり返ったバイオレットの色調の夜空の手前を、光の指（光条）や光線が貫き、滑るようにスライドしていくのを見ることができます。緑色の光は、東の地平線上で力と圧力を集めながら、それ自体の内側から形成されていくような印象を与えます。

ゆっくりと、この移り変わり、光線を放つ淡い緑の力は、バイオレットの夜空を押し上げ、それを天頂（midheaven）へと引き上げ始めます。

ファースト・ライトから30分が経過すると、バイオレットと淡い緑の間に「ブルー（青）」のトーンが割り込んでいきます。光が本格的に広がり始めると、緑は青みを帯びていきます。

地球はこの時間、自らの力を「夜露の形成」として外へと吐き出しています。自然界で利用可能となる生命エネルギーが、地球から上方へと広がっていくのです。湖から立ち上る霧、鳥や昆虫の動き、その他の関連する現象はすべて、この運動のインジケーター（指標）です。これらすべての動きは、ファースト・ライトの直後に、「バイオレットの中へと上昇していくブルー」として描き出すことができます。

このブルーは空間を湾曲させ始め、私たちが日中に目にする「天のドーム（天空）」や「アーチ状の空（穹窿）」を創り出します。これとは対照的に、バイオレット（夜の紫）は平坦で、静止しており、自己完結しています。その動きは、たとえあったとしても、微細でまたたくようなものです。夜の秘密は、このバイオレットの中に収められています。バイオレットは、可視スペクトルの出入り口の「柱」として立っているように、凄まじいパワーとエネルギーへの「閾（境界線）」なのです。このバイオレットの持つ、静まり返り、深く沈思するようなムードは、上昇してくる光（ブルーとグリーン）によって打ち破られ、揺り動かされるのです。

もし私たちが「グローリー」現象の外側の緑（ふち）を思い描くならば、バイオレット（紫）の「上昇」と、光の「緑化」が、日の出とグローリーの外縁部の双方に共通していることが分かります。上方にバイオレット、下方にグリーンという位置関係は、グローリー現象と完全に一致しています。グローリーにおいては、マゼンタとグリーンの外側のリングが互いの内側（と外側）に見られ、マゼンタは常に外側に、グリーンは常に内側に位置します。

「ファースト・ライト（薄明）」とは、実のところ、このマゼンタとグリーンの連帯の「最後の名残」なのです。ここではマゼンタが夜空のバイオレットへと溶け込み、グリーンが地平線近くの「1日の最初の光」となっています。押し上げられていく暗闇（夜）へと差し込んでいく、上昇する光の脈動は、マゼンタとグリーンの帯が幾重にも繰り返される、あの微細な「境界領域」のイメージそのもののなのです。

光が力強く増し始め、空のブルーがグリーンから立ち上がると、いよいよマゼンタとグリーンによる最後の「クレッシェンド（最高潮）」へと達します。

まず地平線から、「淡いローズ（薔薇色・桃色）」が観察できるようになります。このローズ（あるいはマゼンタ）は、うねる波のように、地平線の北側と南側（四方）に沿って上方へと広がっていきます。この波が地平線から20度ほどの高度に達したちょうどその時、昇りくる太陽の上の空全体が、ブルー（青空）の層と重なり合うように、淡いマゼンタの色調を帯び始めます。高層の雲が存在しているとき、それらの雲は「涼しげな薔薇色の白熱光」を放って輝きます。

雲がこの薔薇色に開花するとき、朝の空には「完全なスペクトル」を視認できることがよくあります。手前の雲の上には赤、黄、橙が、そしてその背後の空には青、緑、紫が広がっているのです。

この素晴らしい幻影は、ほんの短い1～2分間しか続かず、その後急速に衰え始めます。雲は灰色に変わり、空は少し暗くなり、薔薇色のニュアンスは消え去ってしまいます。

しかし、この薔薇色の開花が消え去ったとき、反対側（西）の地平線へと振り返った観察者は、ある驚くべき経験をするようになります。

東の空で薔薇色が消え去ったのと「ほぼ同じ高度」の、西の地平線の遙か上空の暗い空に、あの薔薇色の開花が、まるで魔法のようにポツンと浮かんでいるのです。それはあたかも、天空のアーチを跳び越えて、西の空に再出現したかのように見えます。

太陽がさらに昇るにつれて、このマゼンタ・ローズはゆっくりと下降し、西の地平線上で力を蓄えていきます。そこでは、「上方の鮮やかなローズ」と「下方の深く沈思するようなブルー」が、鮮烈なコントラストをなして、下の暗闇（夜の名残）を押し潰していきます。このローズがブルーを押し潰す（圧縮する）プロセスによって、地平線のちょうど真上に「バイオレット（紫）」が立ち現れるのです。

この現象は、グローリーの「マゼンタとグリーンの外側の帯」が、空間において圧縮され、重なり合っていることの現れ（顕現）に他なりません。私たちは、昇りゆく太陽に先駆けて空間を走っている「幾重にも重なり合った光の帯（グローリーの波）」を、空を通じて透かして見ているのかもしれないのです。

科学的な説明がどうであれ、これらが驚くべき現象を構成していることに変わりはありません。

これらの色彩の帯が西の地平線に集まっているとき、東の地平線からは、やがて太陽が昇ってくる場所の近くにある「かすかな温かみのある赤」を除いて、多くの色彩が失われています。この赤の中には、第1の波（ファースト・ライト）のあの薔薇色（ローズ）に取って代わる、明確な「ヴァーミリオン（朱色・鮮紅色）」の色調が存在しています。

地平線から薔薇色の開花（ローズ・ブルーム）が展開していく様子は、観察者に対して、「水を入れたグラスの中に一滴のチンキ（原液）を落とした」かのように色彩が作用しているという印象を与えます。

色彩は、まず地平線に沿った「濃縮された帯」として現れます。そして太陽が昇るにつれて、その色彩は濃縮された帯から空全体へと広がっていき、このプロセスによって「希釈（薄めること）」されていくのです。濃いマゼンタ（赤紫）は、空へと広がっていくことで、鮮やかなローズ（薔薇色）へと変化します。

このように、「濃縮された色彩が、より明るく、より希釈された色彩へと広がっていく運動」こそが、日の出という現象のまさに核心にあるものなのです。

この「広がっていく運動（拡散運動）」は、薔薇色の開花（ローズ・ブルーム）に続いて現れる次の色彩の波において最も顕著になります。

「グローリー」のモデルが示しているのは、ローズ・ブルームの次に現れる色彩の波は、薔薇色がスカーレット（緋色）やヴァーミリオン（朱色）へと深まっていく動きであるということです。しかしグローリーをよく観察すると、内側のローズの帯と、スカーレット／ヴァーミリオンの帯との間に、「色彩の存在しない空間（空白）」があることに気づきます。もし色彩が（グローリーの）外側の帯の順序に従うのであれば、ここには「緑（グリーン）」があるはずの場所です。

この事実は、自然界における（純粋な）光とは、実のところ「淡い緑色」なのではないかという考察へと私たちを導きます。ゲーテのプリズム実験もこの点を指し示していますし、薄い金箔の層を通して景色を眺めたとき、金箔が光に緑色のニュアンスを投げかけるという事実もこれを裏付けています。古代から「金」は太陽の光と結びつけられてきました。緑色があるべきグローリーの「空虚な空間」は、この古代の信仰（直感）を裏付けているように思われます。

現実の自然、すなわち日の出においては、この（グローリーの空白にあたる）空間は、朝の「本物の光（真の光）」の最初の到来によって満たされます。

この光の到来とともに、ローズ・ブルームは西の空へと薄れていき、東の空の上層部には本物のブルー（真の青）が見られるようになります。地上の影の中には濃いパープルやバイオレットが見られ、地平線と空の上方に立ち昇るブルーの間には、かすかな黄・橙・緑の帯が一系列に連なっているのが見えます。グローリーの「空虚な」空間において、私たちは完全な連続スペクトルを伴った「最初の本物の光」の出現を目にするのです。

しかしながら、このスペクトルは「3つの偉大な色彩のグループ」へと分割されます。すなわち、【光の背後にある色】、【光の周辺にある色】、そして【光の手前にある色】です。

1) 光の背後にある色（The colors behind the light）

これらは「ブルー（青）」と「バイオレット（紫）」です。自然界では、空の青や、遠くの山々の青として見られます。これらは、光が暗い背景（闇）の上を通過するときに生じます。日の出においては、ローズ・ブルームの後に、最初の本物の光とともに現れます。光の背後にある色は、「空間」、そして「後退」「収縮」「冷たさ」の感覚と結びついています。

2) 2. 光の手前にある色 (The colors in front of the light)

これらは、闇のヴェールを通して見られる光の効果を表しています。これらの色は、光の手前にある最も暗い色である「マゼンタ（赤紫）」から、「クリムゾン（深紅）」「カーマイン（洋紅）」「スカーレット（緋色）」「ヴァーミリオン（朱色）」、そして「オレンジ（橙）」に至るまでの「レッド（赤）系」の色彩です。

赤系の色彩は、光に近づくにつれて段階的に暖かさを増していきます。これらの色は、「物質（実体）」や「物質世界」と密接に結びついています。例えば、植物が枯死するときにこれらの色に変化することや、動物界において高等動物の「肉や血」の色として現れることから、このことが観察できます。光の手前にある色は、観察者に向かって「進出してくる（近づいてくる）感覚」、「拡大（炎症）」、そして「暖かさ」と密接に結びついているのです。

光の周辺にある色 (The colors around the light) は、暖かさと冷たさの両方を併せ持っています。これらは、光のすぐ周りを取り囲む「闇の微細なヴェール」を表しています。

温暖な側（暖色側）には、温かみのある黄色や緑がかった黄色があり、それが光の放つ淡い緑へとつながっています。これらの色は、光の「手前」にある闇のヴェールです。

寒冷な側（冷色側）、すなわち光の背後にある色の側には、淡い緑に最も近いターコイズ（緑青）があり、それが緑がかったブルーへとつながっています。

光の周辺にある色は、他の2つの（極性的な）傾向に対する「基調（グラウンド）」として機能します。これらはスペクトルの両側（赤側と青側）を結ぶ「架け橋」を形成し、大気の状態において頻繁に現れます。そして、他の色彩のグループにおける不均衡（を調和させ、サポートするために用いられるのです）。

これら3つの色彩のグループは、昇りくる太陽がグローリーの外側の帯とともにバイオレットをはるか上空へと押し上げるとき、朝の空に姿を現します。水彩画において、マゼンタと淡いビリジアン・グリーン（緑）の微細なヴェールを互いに重ね合わせると、大気を感じさせる（空気感のある）ブルーを創り出すことができます。自然界においては、緑とマゼンタの外側の帯が、外側のリングの内側にあたる「ローズ・ブルーム（薔薇色の開花）」において最高潮に達します。

ここで、薔薇色は昇りゆく太陽とともに上昇を続け、雲から雲へと上方へ飛び移りながら、地平線に沿って西へとゆっくりと溢れ出していきます。東の地平線から薔薇色が薄れていくと、完全なスペクトルの頻繁な出現を前触れとする、短い「インターメッツォ（間奏曲）」が訪れます。雲ははるか上空で薔薇色、バイオレット、パープルを見せ、その下方には温かみのある赤や、しばしばオレンジを見せます。空のグラデーションは、上空のバイオレットからコバルトブルーを経て、地平線近くのターコイズへと至ります。その後、これらすべての色彩が薄れていくインターメッツォがやってくるのです。

このインターメッツォにおける薔薇色の退色は、東の空が数分間にわたってニュートラルな色彩に支配されることで、完全に完了することもあります。また、高層の雲がローズ／マゼンタで輝いているまさにその時に、低層の雲に温かみのあるヴァーミリオンやオレンジが広がり始めるため、退色がまったく目立たないこともあります。

もし雲が十分に大きいものであれば、その雲の「頂上部にはローズ・マゼンタとバイオレットの影」を、そして「底部にはヴァーミリオンとスカーレット」を同時に観察できることさえあります。

このインターメッツォの長さがどれほどであれ、それは地平線上に太陽が実際に姿を現す瞬間に伴う、きらめくゴールドデン・イエロー（金黄）、強いオレンジ、鮮烈なスカーレット、そして淡く涼しげなレモン・イエローがひらめき渡る「スケルツォ（諧謔曲／急速な舞曲）」への前奏曲（プレリュード）なのです。

黄色と温かみのある赤の上昇にともない、色彩の完全なサイクルが再び達成され、フルスペクトルがはっきりと現れることがよくあります。「グローリー」の内側の円は、マゼンタとグリーンからなる宇宙的な「外側のリング」とは対照的に、地球上に物質化した色彩の円なのです。オレンジ、赤、黄色といった色は、植物の世界や鉱物の世界によく見られます。

日の出においては、これらの温かく実体のある色彩が雲を燃え立たせ、急速で「炎症をとまなうような最高潮（クレッシェンド）」へと広がっていき、最後には地平線を横切って響き渡る（歌うような）太陽の顔から放たれる、突き刺すような光線によって終わりを迎えます。この光の到来とともに、地球上には（鋭い直線的な）影が穿たれ、夜の色彩たちは大気から逃げ出すようにして、大急ぎで物質（オブジェクト）へと定着していきます。

かつてローズ・ブルーム（薔薇色の開花）の間に、地球近くの暗い大気の中で自由に戯れていた「赤系」の色彩たちは、今や乾燥し、物質の「中」や「上」へと固定されてしまいます。早朝の時間帯には黄色や紫、薔薇色の色調とあんなにも自由に混ざり合っていた「青系」の色彩たちは、硬化して、日中のコバルトブルーや結晶のようなスカイブルー（青空）へと変わるのです。

正午になると、すべての色彩は逃げ去ってしまいます。それらは物質の下にある、小さな影の溜まり場（プールの底）へと隠れてしまうのです。色彩たちの持つ鮮やかさや運動性は、あまりにも眩しい太陽光のぎらつきによって、色褪せた残響へと固定されてしまいます。この強力な（光の）猛攻撃の中で、影は単なるグレーや黒へと縮小されてしまうのです。

しかしながら、日没の約1時間半前になると、西の地平線の空が淡い黄色で輝き始めます。高層の雲が、日の出の「黄色いフラッシュ」の最後の耳障りな（強烈な）音色であった、あの黄色のニュアンスを再び拾い上げ始めるのです。

なぜなら、今度は「グローリー」が、全く逆の順序で再び自らを繰り広げようとしているからです。太陽が地平線に向かって移動するにつれて、強いオレンジやヴァーミリオン（朱色）の赤が立ち昇り始めます。

この夕焼けの現象は、日中の活動によって大気中の塵の粒子が増加したためであると、しばしば（現代科学によって）帰せられてきました。しかしながら、これと全く同じオレンジは、太陽がまさに昇ろうとしている夜明け前にも、夕暮れ時とまったく同じように見ることができます。どちらの事例においても、オレンジは強い黄色や淡い緑をともなって見出されるのです。

日没時、私たちは太陽が地平線に触れる直前にオレンジを目にします。同様に日の出時にも、太陽が地平線に触れる直前にオレンジを目にします。

朝には、ヴァーミリオンやスカーレットが、黄色いフラッシュに「先駆けて」広がります。

夕方には、ヴァーミリオンやスカーレットが、太陽が沈んだ後に雲の上で「くすぶり（残り火となり）」ます。

朝には、ローズ・ブルーム（薔薇色の開花）は日の出の「45分前」に現れます。

夕方には、ローズ・ブルームは実際の空の夕日の「45分後」に現れます。

これらのことから、日の出と日没の色彩は一貫しており、全く同じ法則性に従っていることが分かります。

しかしながら、この法則性の中に「変化」がないというわけではありません。それどころか、異なる色彩の帯の動きや持続時間には、広大でありながらも微細な違いが見られるのです。例えば、ローズ／グリーンの帯とヴァーミリオン／イエローの帯の間にある、あのグローリーの「空虚な（空白の）」インターメッツォ（間奏曲）の場所は、状況によってかなり変化し得ることが観察できます。

・熱帯地方（低緯度）の日の出

太陽が地平線から真上へと垂直に昇るため、ローズ（薔薇色）と、オレンジをほとんど含まない「鮮やかで涼しげなイエロー」の非常にくっきりとした帯が現れます。ここではローズは脈動（パルス）せず、夜明け前の暗闇の中を高く広く広がっていきます。その後、夜明けが進むにつれて、ローズは急速に西の地平線へと押し上げられ、そこでは強烈な「ローズ／インディゴ（赤紫と藍色）」の極性（コントラスト）を見ることができます。この間、東の空では色彩がほとんど失われることなく、イエローが歌うように立ち昇り、積乱雲の上から逃げ去っていくローズに取って代わります。

・真冬の高緯度地方（北欧など）の日の出

これとは対照的に、冬の太陽が苦痛なほどゆっくりと昇るため、ファースト・ライト（薄明）から太陽が地平線上に現れるまでに、ほぼ2時間を要します。この低い角度での日の出には、上空の水雲の上で、何度も何度も脈動しては弱まっていく「極めて淡いローズとグリーン of 多重の波」が伴います。下方の積雪の上では、鈍く弱いオレンジが太陽の接近を告げる前の1時間もの間、蝋燭のように明滅するローズの光の下で、バイオレット、エーテル的なブルー、深いインディゴ、そして涼しげなターコイズの気配が戯れています。このローズの最後の輝きは、引き延ばされた「灰色の期間（インターメッツォ）」を先導し、その後に淡いオレンジが、まるで深いメランコリーの眠りから目覚めたかのように立ち昇り始めるのです。

・乾燥した中緯度地方の日の出

夜明け前のバイオレットの色調を帯びた上層大気の中で、淡いローズが何度も脈動するものの、決してクレッシェンド（最高潮）に達することはありません。クライマックスはゆっくりと訪れ、色彩の円の中心にあるオレンジのトーンが、日の出そのものを支配します。

これらの観察は、「グローリー」という現象に含まれる深い神秘を指し示しています。これらの色彩の帯の構造は、古くからの錬金術における「湿」と「乾」という分類に完全に一致しているのです。「湿った現象」とは、「硫黄（サルファー）のプロセス」に結びついている現象のことです。

硫画（サルファー／燃焼）は燃焼のプロセスですが、この燃焼プロセスがどのように展開するかには「2つの道」があります。

「湿った燃焼（湿った硫黄プロセス）」は、植物の世界において、植物が花や果実、種子を生産するために自らを燃焼していく様子に見ることができます。ここでは、流動性、芳香、そして色彩が生み出されます。このような「湿った硫黄の燃焼」から放たれる光は、スペクトルの「青い極（寒色側）」へと向かう傾向があります。グローリーの完全な図（図2）において、私たちはローズとグリーンが交互に現れる場所に、この「青い極」が立ち昇るのを目にするのです。

ここで私たちは、「光（グリーン）と、光の手前にある闇（ローズ）から構成されている色彩から、一体どのようにして『ブルー（青）』が立ち現れてくるのか」という問いを立てることができます。

この問いに答え始めるためには、物質（オブジェクト）に定着した状態の色彩という捉え方から脱却し、色彩を「生成（これからなっていくプロセス）」あるいは「立ち現れ（出現）」のプロセスとして内面的に捉え直すことが助けになります。

【図2：グローリーの完全なダイアグラム（解説図）】

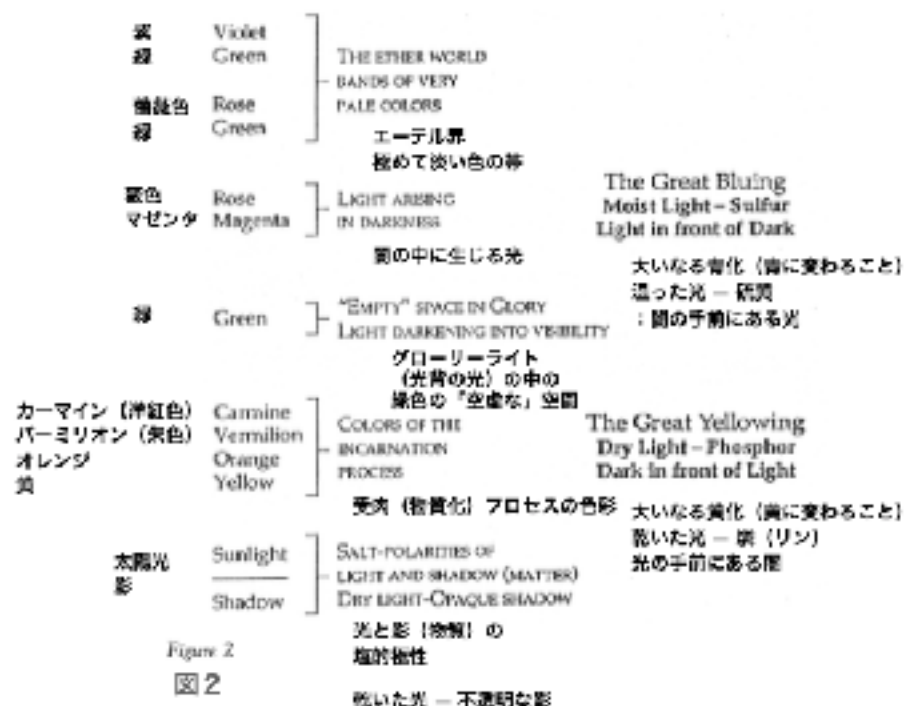


図2から分かるように、そこには数多くの異なる「光」と「闇」が存在しており、それぞれが他者との相互関係に依存しています。

1) 円の中心から始めると、そこには「シャドウ（影）」あるいは「マター（物質）」とラベルされた暗闇（闇の極）を見ることができます。グローリー現象においては、物質が大気の中に投げかける「影」が常に存在し、それがグローリー現象の「焦点（中心点）」として機能しています。

2) この暗い焦点（中心）は、光の場（フィールド）によって取り囲まれています。その光は段階的に暗くなり、温かみのあるイエローへ、次いで温かみのあるヴァーミリオン（朱色）のレッドへ、そして最終的には涼しげなカーマイン（洋紅）へと変化していきます。

これと全く同じグラデーションは、自然現象における「ローソクの炎」の色彩のグラデーションの中にも見ることができます。黒い芯（中央）の周りを輝くコロナ（内炎）が囲み、それは上方に向かって黄色へと細くなっていき、最終的には、動きの鈍い炎の先端にある「温かみのある赤（外炎）」へと行き着きます。

錬金術的に言えば、「暗闇（影）が中心にある燃焼プロセス」とは、高められた「重力」の条件を示しています。

光の場の中央に存在する、グローリーの中心の「影」とは、かつて錬金術において「ダスト（塵／灰）」として知られていたもののイメージ（象徴）に他なりません。ある物質が「燐の燃焼プロセス」を通過させられると、それは段階的に乾燥させられ、粉々の「塵」へと原子化（微細化）されます。この塵や煙は、光の「黄変化」として特徴づけられました。

この暗い中心とは、「乾燥させていく光の場」の中に存在する、自律的な「重力点（中心点）」のイメージなのです。

光が黄変化していくプロセスにおいて、「熱」の影響下で「個体化のプロセス」が働いています。平面（宇宙）に対比される「点」、共同体（全体）に対比される「個」、それ自体の重力中心を持つ自律的な「塵の一粒（モート）」は、すべてこの大いなる「黄変化のプロセス」の象徴なのです。その中心には、物質の暗いビジョン（闇）が横たわっています。その光は、不透明な影を投げかける「乾いた光」です。この赤系のグラデーションは、まさに「肉体化（インカーネーション／この世への誕生）」の絵図そのもののなのです。

そうであるならば、この（黄変化・肉体化の）現象が、地上の地平線上に太陽が物理的に出現する瞬間に伴って現れるのは、一体何の不思議があるのでしょうか。太陽の出現とともに、すべての物質は突如として、個別のくっきりとした影を地面に穿ち、その一方で、頭上の空は温かみのあるイエローやオレンジ、レッドで満たされます。

この瞬間、太陽の持つ「拡張的で、軽力（レヴィティ／反重力）に満ちた生命のエーテル力」は物質へと固定（縛り付け）され、物質の持つもう一つの極である「影の極」が突如としてこの世に誕生するのです。

日の出のこのフェーズ（局面）を熟考することから湧き上がる感情は、一種のメランコリックな「レットダウン（失望感／幻滅）」として経験されるかもしれません。なぜなら、それまでのすべての可能性やドラマが、ついに物理的な光の中に到達し、固定されてしまったからです。

色彩たちは今や空や雲から消え去り、夜明け前の地球と空が持っていた豊かな暗闇（夜の深み）は、地球上を照らし始める過酷で乾燥した光の増大に対抗するように、空の中のますます増大していく「青み」と「水分」によって希釈され始めます。

おそらく、真夜中に地球の「底（内側）」から上へと輝く太陽を崇拝していた古代のドルイド（ケルトの聖職者）たちは、この魂のムード（メランコリー）と、「それを一体何が癒やすことができるのか（治癒への道）」を深く理解していたのでしょう。

もし、この大いなる「黄変化」が、個体化（分離）と自律的存在の持つ「乾いた重力」のイメージであるならば、ゲートに従うならば、その極性的な（正反対の）対極にあるのは大いなる「青変化」となるはずで。なぜなら、黄色と青こそが、彼の最も根源的な極性（2大主調）だったからです。

しかし、グローリーの完全なダイアグラム（図2）に目を向けると、そこには「ブルー（青）」への言及がどこにもありません。私たちは、光の手前にある闇を表す「温かみのあるイエロー」と、宇宙の帯である「ローズ／マゼンタとグリーン」の帯との間の色彩のグラデーションに、「光のギャップ（空白）」があるのを見ることができます。

ゲートのプリズム実験におけるグリーンとローズ・マゼンタの帯の形成を思い起こすことで、私たちは、おそらくこれらの現象（青の出現）に対するある洞察を得ることができるでしょう。

白い背景（場）の上に置かれた「暗い一本の棒（黒い帯）」は、涼しげなスペクトルの「紫色の端（バイオレット・エンド）」を、温かみのあるスペクトルの「赤色の端（レッド・エンド）」の向こう側へと交差させました。このバイオレット（紫）とレッド（赤）の交差から、あの「ローズ／マゼンタ」の色彩が立ち現れたのです。ルドルフ・シュタイナーは、ゲートに倣って、この最高の色を「ピーチ・ブロッサム（桃の花の色）」と呼びました。

赤でも紫でもないこの色彩（マゼンタ）は、「赤外線」と「紫外線」が深夜の虹の色彩世界における「ヤヒンとボアズ」として立っている、あの空間の中に存在しています。

※〔訳註：ヤヒンとボアズとは、聖なる原型たちが宿る庭園の入り口の両脇に立つ、薔薇十字鍊金術師の「2本の柱」のこと〕

この（マゼンタの）領域においては、細分化され孤立した自律性（個体化）の代わりに、すべてを一つに統合する「全体性」が支配しています。

ゲートは、このローズ／マゼンタの色彩を「エロヒム（創造神）の創造的な力」と呼びました。この色を通じて、私たちは「アストラル界」の色彩言語が「エーテル界」へと働きかけていく、その（世界の）裏口、すなわち「前次元的な統合（根源の調和）」の姿を垣間見ることができるのです。

乾燥した温かいイエローやレッドの中には、精神（スピリット）が「肉体化された物質（この世の具体的な実体）」を生み出していくプロセスが見られます。

一方、ピーチ・ブロッサム（桃の花の色）の薔薇色の輝きの中には、みずみずしさを与える「宇宙的な硫黄（サルファー）」が、重力に逆らって立ち昇っていく「軽力（レヴィティ／反重力）」の姿が見られます。

ここにおける熱（エネルギー）は、目に見える「火（燃焼）」の圏域から引き上げられ、化学反応の「潜在熱」や、軌道を運行する「惑星たちの微細なエネルギー」へと昇華されています。夢を構成する素材は、まさにこのような薔薇色の色調のパレットによって印刷（描写）されているのです。ライラック、バイオ

レッド、パープルといった色は、色彩の閾（境界線）の向こう側へと手を伸ばしている同じグループに属しています。

グローリーのダイアグラム（図2）を見ると、外側の帯にある「ローズ・マゼンタとグリーン」から、内側の帯にある「レッドとイエロー」へと段階的に進んでいくグラデーション（進行）を確認することができます。

周辺部（宇宙の果て）にあるバイオレットのさらに「その先（外側）」から入ってくるこのグラデーションは、最終的にはバイオレットとインディゴ（藍）を通過し、次いでブルーの層を通過して、内側の帯と外側の帯の間の「ギャップ（空白）」に光の減衰として浮かんでいる「グリーン」へと向かうプロセスなのです。

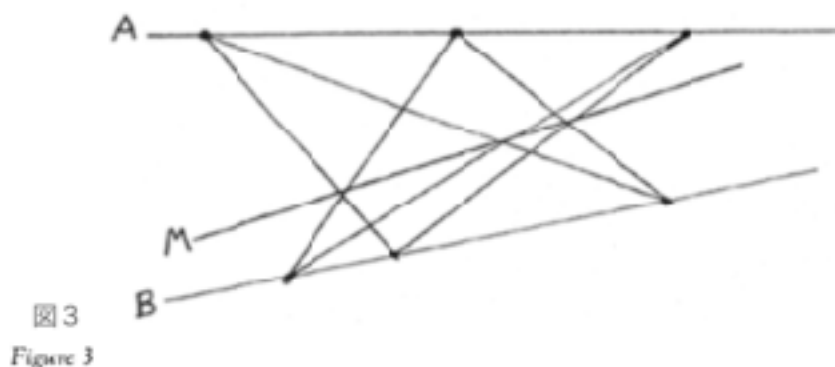
これと同時に、バイオレットの周辺部（宇宙の闇）は、内側の帯にあるカーマイン（物質の赤）と相互作用しています。この相互作用の中で、グリーンとの「相互の満ち引き（往復運動）」を起こしながら、ローズ／マゼンタが立ち現れます。その結果、「光の手前にある闇（赤側の濁り）」と「光の背後にある闇（青側の闇）」の双方が同時に存在することになるのです。

もし私たちが、このローズ／マゼンタとパロット・グリーン（黄緑）を重ね合わせるならば、本質的に「青みを帯びた色彩（ブルー）」が立ち現れてくるはずです。

「暗くなっていく光（グリーン）」と「明るくなっていく闇（ローズ／マゼンタ）」が、互いに行き交いながら交互に現れるこの（グローリーの）脈動は、ダイナミックで相互的なプロセスが『全く同じ空間に、同時に（重なり合って）』発生する、あのはるかなるエーテル界の「神秘的空間」のイメージ（縮図）に他なりません。

射影幾何学においては、1つの直線 A 上にある点群を、別の直線 B 上へと相互に投影（射影）すると、これら元々の2つの直線が互いに共有している、1つの直線 M の上に一連の点群が立ち現れることとなります。これら元々の2つの直線の「間に位置する直線（直線 M）」は、それら2つの直線の間に成り立つ「相互の関係性」そのものを視覚化したイメージなのです。（図3）

【図3】



「グローリー（光輪）」の現象において、グリーン（緑）とローズ／マゼンタ（赤紫・桃色）は、互いに反転（往復）し合う極性（相補的な関係）にあります。この2つの色彩は、アントロポゾフィー（人智学）において「エーテル界」として知られている、物質をポテンタイズ（希釈振盪）することが可能となるあのダイナミックな空間を共有しているのです。

グローリーの中に見出されるこのエーテル的空間とは、「暗くなっていく光（グリーン）」と「明るくなっていく闇（ローズ／マゼンタ）」が、互いに反転（射影）し合う空間に他なりません。この反転（相互作用）の空間は、これら2つの色彩の持つ相補的でダイナミックな関係性の現れ（絵図）として、それ自身固有の色彩、すなわち「ブルー（青）」を持っています。

錬金術的に言えば、私たちはこのプロセスを「大いなる青変化」と呼ぶことができるでしょう。「大いなる青変化」とは（生命の）硫黄（サルファー）の燃焼であり、その錬金術的原理は【硫黄（エネルギーの解放）／湿】の極へとつながっています。これとは対照的に、錬金術における「大いなる黄変化」は、燐の燃焼の一例であり、その錬金術的原理は【塩（硬化・結晶化）／乾】です。

これらの（青変化と黄変化という）プロセスの間にあるのが、その中心に「いかなる暗闇（影）も持たない」という、あの光のギャップ（空白）なのです。それは、柔らかく、いかなる影も投げかけることのない、涼しげで安定した光です。中心に暗闇の核を持つ代わりに、それは「2つの暗闇の真ん中にある光」なのです。

バイオレット（青紫） [宇宙の夜の闇の極]
 ローズ（薔薇色）
 グリーン（緑）
 ローズ・マゼンタ（赤紫・桃の花の色） [宇宙のエーテル的な極性]
 グリーン（緑）

インターメッツォ（間奏曲）／
 2つの暗闇の真ん中にある光のギャップ（空白）
 影を作らないエーテル光／真の青]

カーマイン（洋紅）
 ヴァーミリオン（朱色・鮮紅色）
 オレンジ（橙）
 イエロー（黄） [物質の個体化・肉体化の極]
 ライト（物理的な光）
 シャドウ（地上の硬い影・物質） [中心にある重力の極]

一方の暗闇は、影、無意識、そして重力に貫かれた「肉体（物質性）」へと私たちを導きます。これこそが、光の手前にある、物事をバラバラに細分化していく（個体化の）暗闇です。

もう一方の暗闇は、宇宙の周辺と、拡張していく「軽力（反重力）」へと私たちを導きます。これこそが、光の背後にある、超越的で、カオス（混沌）に満ちた、創造的な暗闇なのです。

これら2つの暗闇の間に息づいている光そのものは、肉体化（インカーネーション）や細分化（個体化）をもたらす、あの「乾いた光」ではありません。この光こそは、錬金術における「大いなるメルクリウス（水銀／変容の神）」であり、炭素の試金石であり、無私なる治癒者、すなわち「キリスト」に他なりません。

2つの大いなる、あくびを噛み殺すような（巨大な）暗闇の間で、自らを暗く沈めていく身振りとして静かに自らを「緑化」させているこの光は、かろうじて感知できるかできないかというほどのものです。それ

は耳を澄ませている光（リスニング・ライト）であり、感謝に満ち、白い薔薇の花びらや、上空の巻雲の柔らかなひだに、自らの「恵み（優美さ）」を喜んで授けようとしています。

地上へと自らの死にゆく「自己犠牲」を投げかけているこの光こそが、「大いなる黄変化」の持つ傲慢（傲慢な物質主義）と、「大いなる青変化」の持つ恐怖（狂信的な霊主義）との間を調和させる、大いなる均衡者なのです。

日の出においてこの光は、薔薇色の暗闇が完全に開花して反対側（西）の地平線へと逃げ去り、肉体化（物質化）の最高潮であるフィナーレがいよいよ始まろうとする、まさにその瞬間に訪れます。それは、激しく脈動する2つの暗闇の華やかなスカーフ（光の帯）の間に現れる、「一瞬のメルクリウスの優しさ（繊細さ）」として姿を現すのです。

注意を払わない人々が、朝や夕方の空においてこの光を目にすることは滅多にありませんし、その存在を否定することさえあるでしょう。しかし、それは鮮やかに彩られた雲の切れ端の間で、自らの均衡を保つ生命を確かに生きているのです。

このような遠近法（視点）から眺めるならば、私たちは「グローリー」現象を、人間の魂の中で働いている凄まじいプロセスの、大気における「ルーン（神秘的な象徴）」として描き出すことができます。

・大いなる黄変化

今日のポップカルチャー（大衆文化）にあまりにも蔓延している、下層の自己（エゴ）を燃え立たせ、肥大化させようとする傾向のイメージ（象徴）です。私たちは、世界の塵によって自分たちの光を暗く曇らせることを通じて、芸術においては「無意識」を神格化し、魂の生活全体を「パーソナリティ（個性・我執）の色」で燃え立たせる傾向にあります。アートビジネスやエンターテインメント業界は、この（傲慢な）傾向の多くの例を提供しています。科学の世界におけるこの象徴が、まさに「起電力（エレクトロモータース・フォース：電気のテクノロジー）」を取り巻く技術なのです。

・大いなる青変化

これとは完全に正反対の極において、私たちは「ニューエイジ現象」の拡張的な（際限のない）宣言を経験することができます。多種多様な形態をとる精神主義（スピリチュアリズム／心靈主義）が、この大いなる青変化の典型例です。

自らを緑化させる光、すなわち「キリスト」は、地球上のあらゆる瞬間に現存しています。*彼は、2つの暗闇の間の空間にいるのです。

日の出の波が地球のまわりを旅していくにつれて、彼は絶え間なく地球の表面の上を移動し続けています。各瞬間、世界のどこかで、日没や日の出の雲の間から、淡い緑色の光の繊細なまたたきが、外側へと光線を放っているのです。

その瞬間、それを見る目を持つ人々（目の開かれた者たち）に対して、彼は「父なる神の意志」を通じた「聖霊の力」を明らかにし、2つの暗闇の間の引き裂かれた分断を癒やし、道徳的な悲慘（倫理的な絶望）に直面している世界に対して「完全なる統合（全体性）」を宣言しているのです。

しかし、世界の塵の中を大急ぎで通り過ぎていく他の人々にとっては、それは「単なる、いつもの日の出」にすぎないのです。